
ただ、そばに居たいだけ

bunny

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ、そばに居たいだけ

【Nコード】

N8773D

【作者名】

bunny

【あらすじ】

あなたの瞳には・・・あたしなんて少しも写っていなかったね。
ただ見ているだけでよかったはずなのに、それがすごく苦しかったんだ・・・

視線

キーンコーンカーン・・・

HR終了を告げるチャイムと同時に、
ガヤガヤと周りが騒がしくなる。

楽しそうに友達と教室を出て行く子、
中には幸せそうに恋人の元に駆け寄る子。
学校が終わった開放感からか、
みんな晴れやかな表情を浮かべている。

「おい。芽衣!!」

ぼーっとしていた所を友人の真希に声をかけられ、はっと我にかえる。

「あ、真希。」

「あ、じゃないわよ。早くしないとバスケット部の練習始まっちゃうよ」

真希は呆れたようにため息をつくと、時計を指差して芽衣をせかす。

「えっ・・・本当だ!」

「美紗は先に行ってるって。」

「そっか」

芽衣達は毎日、

放課後になると男子バスケット部を見に行くのが習慣だ。

「芽衣、真希、遅い」

体育館に着くと、美紗が待ちくたびれたように声をあげる。

「ごめんごめん。」

「もう練習始まつてるよ」

美紗の指差した方向を見ると
案の定、練習が行われていた。

「やーん！！須藤先輩、今日もかつこいい！！」

芽衣たちの1つ上で

キャプテンでもある須藤がゴールを決めると、
さっきまでブツブツ文句を言っていた美紗が
嘘みたいに黄色い声援をあげる。

「本当にカッコいいよねえ。須藤先輩。」

いつもはクールな真希も、
うっとりしたように須藤を見つめる。

もちろん須藤のファンは
美紗や真希だけじゃない。
あちこちから須藤へ向けて

黄色い声援が飛ぶ。

ほとんどの女子の視線が須藤に集まる中、
芽衣ただ一人の視線が
目立たない1人の男子に注がれる。

渡部裕也。

あたしのクラスメイトで
どこにでも居そうな平凡な男子。
喋った事もないし、
いつ好きになったのかさえ分からない。

たぶん・・・
あなたがときどきあの人へ向ける
悲しいくらい切ない眼差しに気づいたときから
あたしはあなたに惹かれたのかもしれない。

いつかその瞳であたしを捕らえてほしくて・・・

でも、あなたの瞳には・・・
あの人しか写らないんだよね。

想い人

あなたを見ていると・・・
胸がぎゅっと締め付けられる。

あなたがまっすぐに見つめる、
その視線の先をたどると、

やっぱり・・・
そこには音楽に乗せて
軽やかにリボンを操るあの人の姿。

紺野友華

「綺麗だよねえ。友華先輩。」
「・・・うん。女のあたしでも惚れそうだもん。マジで」

さっきまで須藤先輩に黄色い声援をあげていた
美紗と真希の視線も、
いつのまにか友華先輩を追っていた。

雪のように白い肌。

レオタードから伸びるすらっと長い手足。

栗色でつやつやの髪の毛。

小さい顔の中にはくいつと口角のあがった口、
綺麗な鼻筋、くるくる大きい瞳、長い睫。

まさに完璧すぎる容姿。

勝ち目ないじゃん・・・あたし。

渡部君が友華先輩を好きかなんて
誰かから聞いたわけじゃない。

でも、渡部君を見ているだけで分かる。
友華先輩への痛いほど強い気持ち。

・・・ピピーツ

体育館中にホイッスルの音が響く。
どうやらバスケット部が休憩に入ったようだ。

同時に新体操部も休憩に入ったらしく、
タオルで汗を拭う渡部君に友華先輩がそっと微笑む。

嬉しそうに、幸せそうに
笑顔を浮かべる渡部くん。

やだ・・・

毎日見てる光景じゃん。
なのに・・・無理。

胸が押しつぶれそうになって、
呼吸がしづらい。

ほかの誰にもそんな顔しないくせに。

あたしの視線に気づかないほど、
あなたは先輩に夢中なんだね。

「ちょっと芽衣!？」

「どうしちゃったのー?」

気づいたら涙があふれてた。
あまりにも自分が惨めで馬鹿みただったから。

「・・・うつん、なんでもない。ちょっとトイレ行ってくる。」

美紗と真希にそう告げて、
その場を離れる。

2人は心配そうにあたしを見ていたが、何も言わなかった。

謎

女子トイレの鏡の中をそつと覗き込む。

その中には目の充血したあたしの顔が映し出されて
おもわずため息が出る。

好きになる以前から、
渡部君の想いには気付いていた。

なのに・・・

「なんで好きになっちゃうかなあ・・・」

「なにか悩み事？」

おもわず口から出た言葉の後に聞こえた声。

慌てて振り返ると、
そこにはここに居るわけのない人物、
須藤先輩が立っていた。

「あ・・あの・・先輩。ここ女子トイレですよ？」
「知ってる」

「じゃあなんで・・・」

「石鹼。男子便になかったから女子便から借りようと思って」

そう言うと、あたしの顔の横に手が伸びてきて、
その後ろにある石鹼を取りあげた。

「そうだったんですか・・・あつ・・あたしこれで失礼しますねっ」

なんとなく気まずかったため、
そそくさと女子トイレを後にしようとしたその時、

「なあ」

後ろから聞こえた心地良い低い声に、
おもわず足が止まる。

「なんでそんな報われない恋なんかすんの？」

須藤先輩のその言葉に、一瞬頭を鈍器で殴られたような衝撃が走った。

「・なんの・事・ですか？」

必死に言葉を絞り出す。

須藤先輩は、

そんなあたしに苛立ったように顔をゆがめると、

「・・・まあいいけど」

ぼそっとそう呟いて、練習に戻っていった。

「芽衣、遅かったね。大丈夫？」

「うん。大丈夫」

心配そうな真希に笑顔を作って見せる。

バスケ部の練習はすでに開始されているらしく、
渡部君も、須藤先輩も真剣にプレーしている。

なんだっただろ・・・

さっきの須藤先輩の言葉が、
頭の中でぐるぐると渦を巻く。

先輩はあたしの気持ちを知っているのだろうか？
もし知っているとしても・・・なんで・・・？

なんて考えてみても、一向に答えは出るはずもなく、

須藤先輩への大きな歓声の中、
あたしの胸の中はすっきりしないままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8773d/>

ただ、そばに居たいだけ

2011年1月12日02時35分発行